

地誌の記述方法の変化に関する考察

——房総半島安房地域に関する三つの地誌書について——

白 井 哲 之

1 はじめに

筆者は1991年以来千葉県が企画した千葉県史編纂にかかわり、地誌部門の責任者として、『千葉県の歴史』別編地誌1（総論編）、地誌2（地域編）、地誌3（地図集）の調査執筆編集を行ってきた。2003年3月若干期日の遅れはあったが、全3巻の刊行を果たすことができた¹⁾。これは千葉県としては1919年（大正8）以来の地誌の刊行であった²⁾。その間に房総半島は他の地域に例をみないほどの大きな地域変容をとげた。その経過と現状をできるだけ明らかにし、自治体刊行物として一般県民の理解と利用が得られる地誌を心掛けるとともに、学問としての地理学・地誌学の水準の向上に仕するものでありたいと願ってきた。長期にわたる困難な作業ではあったが、多くの地理学関係者や千葉県関係者のご尽力とご協力を得ることができ、今後のこの種の地誌の基準になるものを公刊することが出来たことを感謝したい。

この作業の初期の段階で、どのような地誌であるべきか、その手掛かりを得るためにこれまでに出版された府県などの自治体を単位とする地誌書を検討した。この検討の一部は、既に筆者³⁾や安藤・伊藤・戸崎⁴⁾によって明らかにしたが、自治体史誌の編纂意図や地理学関係者のかかわり方などにより様々な記載方法があることが分かった。またこの検討の中で、千葉県は、県誌をはじめ郡市町村の地誌書が数多く出されていること、研究者による地誌的調査研究も他に比して多くなされていることも明らかになった。これは房総半島というまとまりのある地域が特徴のある自然や生活体系を作り出していることに起因すると思われる。とくに安房地域については、明治以降の日本の地誌の発達を見るとき、その作成意図も作られた時代も異なるが、三つの注目すべき地誌書が刊行されていることが明らかになった。この小論は、安房地域についてのこの三つの地誌書、すなわち大日本地誌『安房国』⁵⁾（内務省地理局 1886年（明治19））、『千葉県安房郡誌』⁶⁾（千葉県安房郡教育会 1926年（大正15））、『房州の地誌』⁷⁾（尾崎帛四郎著 1929年（昭和4）古今書院）について、地誌の記載項目・方法の変化・展開を検討し、地誌の在り方について考察しようとするものである。

安房地域は、房総半島の南部、鋸山と清澄山地を連ねた線から南は三方を海に囲まれた地域であり、温暖な気候に恵まれた南房総として知られる。旧国名では安房国にあたり房州と称されてきた。この地は明治以降の行政制度の中では安房郡となり、現在では館山市や鴨川市を中心とする安房支庁管内

の地域である。この地域は、自然環境的にも、歴史的文化的環境においても、房総半島の他の地域に比して独立性独自の強い地域として知られる。それ故、この地域を対象とした地誌が多くの人々によって記述され試みられてきたと思われる。

2 明治期の地誌と皇国地誌『安房』

皇国地誌『安房』は、内務省地理局が、全国の各町村に資料の提出を求め郡・国を対象として企画した官撰地誌である皇国地誌編纂事業のうち、刊行することのできた唯一の国誌である。この点のみを取り出しても、わが国の地誌を語るにあたってこの地誌書は極めて貴重な存在である。皇国地誌の編纂の意図、挫折にいたる経緯などについては石田竜次郎⁸⁾の一連の研究があり、また山口静子⁹⁾が、明治政府の地誌編纂事業を史料編纂所に残されていた資料から追跡した詳細な研究がある。また式正英¹⁰⁾は明治後期から昭和初期にかけての日本の地誌の発展を論じている。これら先行研究を頼りに、どのような意図で『安房』がつくられたか、またこの地誌は地域の記載方式としてどのような特徴を持つものであり、後続の地誌とどのような関係を持つのか検討する。なおここで皇国地誌『安房』として扱った地誌は、正式には『大日本国誌 第三巻 安房』と表紙に書かれて出版されたものであるが、皇国地誌編纂事業の成果であるのでここでは皇国地誌とした。

式正英¹¹⁾は、明治期の地誌編纂事業を、国家が積極的に地誌編纂に関与した前半と、民間の企画による全国規模の地誌の編纂が進められた後半とに分けることができるとしている。そして前半を代表するものとしては皇国地誌編纂事業を、後半を代表するものは、吉田東伍¹²⁾著『大日本地名辞典』（富山房刊）と山崎直方・佐藤伝藏¹³⁾編の『大日本地誌』（博文館刊）をあげている。皇国地誌編纂事業は途中で中止される状況が生じたが、この状況下で『安房』のみが刊行されたことは明記されてよい。

1872年（明治5）から1892年（明治26）頃までの間は、明治政府にとって、中央集権型の国家経営を進めるにあたって、各地域の諸般の資料の収集把握は必要なことであり、そのための地誌の編纂は急務であった。また対外的にも国民国家の体面を保つ必要からも地誌や地図の作成が求められた。万国博覧会への地図類や地誌類の出品は強く日本国を意識したものであった。

1869年（明治2）民部省に地理・土木・駅通の三司が置かれているが、地理司の仕事内容は模範的な国民の表彰と租税を得るための地図戸籍の整備というもので、土地、戸口、物産の数量的把握から財源となる租税調査までを「地理」という言葉のなかに含めており、そこには中国伝統の統治者の意識がみえると石田¹⁴⁾は指摘している。しかし地誌編纂が具体的におこなわれたのは、民部省ではなく、文部省、陸軍省、太政官正院などにおいてであった。文部省は、学制発布にそなへてか、明治5年に、一県有名物産両三品の資料提出を全国に求めている。これは文部省刊 師範学校編輯「日本地誌略」（明治7年）の刊行に使われたものと思われる。また陸軍省は、明治5年全国地理図誌を企画し各府県に内容を示して提出を求めている。これは『兵要日本地理小誌』（明治6年）と『共武政表』（明治9年）につながったと思われる（石田¹⁵⁾）。

1872年（明治5）太政官正院に地誌課が置かれ塚本明毅を長とした体制がとられ、太政官布告とし

て各府県に皇国地誌編纂事業に必要な書籍類地図類などの採集調査と目録の提出を求めた。この作業が進行し始めた段階で、簡潔な全国地誌の編纂が求められ、畿内七道の国別記載による「日本地誌提要」¹⁶⁾ 8冊77巻が1874年（明治7）から1879年（明治12）までに刊行された。その記載方式は形勢、領域、郡数、戸数、人口、歳額、県治、学校など項目的であり、各項目の数量的・並列的な記述になっている。その記載指示をみると、「名山国中の大山をあげ山下某村より頂上まで若干里と土人唱へ来る里数を正してこれを注す」など当時の編纂者の官吏意識をうかがわせるものや、「三十六町一里の定数をもってこれをあく」と駅亭間の距離の正確な記載など度量衡統一を意識した記載を求めるなど従来の地誌にない部分もある。「名邑 千戸以上及旧藩城下をあぐ」など早急に統一的な略誌を編纂しようしていたため、細部は求めていない。しかしこれは国による地誌の刊行としては、実に和銅年間の古風土記以来のものであった。

1876年（明治8）皇国地誌の編輯例則や着手の具体的要領・例示が定められられ、全国の県市町村を動員して町村誌から積み上げて郡誌、国誌に至る膨大な皇国地誌編纂事業が本確化した。編輯例則は、村誌、郡誌よりなっており、日本地誌提要のときよりもさらに詳しく各項目について例文をあげている。その着手については各府県に地誌担当者をおき、そこで村誌、宿町誌、郡誌をつくらせ、それを地理寮に集めて国誌を編むという方法であった。編輯の指針が与えられたので、府県では地誌掛りをおき、旧藩時代の学者らがこれを担当し、資料の収集、地誌の編輯に着手し、1880年（明治13）頃から漸次成果があがりだしてきた。しかし中央では地誌課は、制度の改変にしばしば見舞われ、その度に業務の断絶もあったが明治11年内務省地理局に落ち着いた。これは塚本明毅と地理局長桜井勉の努力によるものとされる。地理局は伊能図をもととした「大日本全図」「実測東京全図」を始め、地名索引、郡町村一覧、新編武蔵風土記（紅葉山文庫）の復刻などを進めたが、府県の村誌郡誌の作業は遅々として進まなかった。そこで明治18年から府県への委託を止め、その費用で地理局自身による編纂を目指すこととし、それまでに府県にある資料と草稿を集めたところ二千四百部の多きに達したという¹⁷⁾。

1885年（明治18）塚本明毅の病没後、桜井勉地理局長は、自ら属官を率いて安房に行き、実地踏査して、『安房』一冊をまとめ、明治19年春に出版した。桜井局長がどのような理由から安房国を選んだかは明らかでないが、東京に近くて小国である安房を取り上げて、これを見本として作りあげ、全国を一巻ずつにまとめて、大日本国誌にしようと考えていたと思われる。山口静子¹⁸⁾によれば、安房国誌編纂過程を伝える史料はまだ発見されていないが、「安房国誌出版広告草稿 20年4月」が東大史料編纂所に残されている。その中に「大日本国誌出版広告」があり、一国一巻とすること、第一巻総論、第二巻武蔵国そして第三巻が安房国であること、ついで上総、下総、常陸として現在委員を派遣して準備していることなど、皇国地誌の計画がうかがえるとしている。しかし結局続巻の刊行はなかった。

地誌編纂事業のみならず測候事業にも活動していた桜井局長が、1889年（明治22）徳島県知事に転出すると、文部省と内務省の間に地誌編纂・地図調整の事務について移管の話が持ち上がり、その結

果この事業は文部省の所管に移った。ついで帝国大学文科大学に所属し史誌編纂掛り扱いとなった。しかし 1893 年（明治 26）には文科大学の史誌編纂掛の事業が停止となり、ここ 1872 年（明治 5）以来の皇国地誌編纂事業は終わることとなった。

石田¹⁹⁾は皇国地誌が未完成に終わった理由として四つのことをあげている。その一つは皇国地誌編纂事業の推進者がいなくなったこと、加えて漢学的風潮の後退もあげている。第二にこの事業が行政官庁である内務省地理局であったこと、そのため行政に直接必要とは言難い地誌は後退せざるを得なかったこと、第三は国家の統計事業が発達してきたことで、当初地誌に求められた人口や物産の数量的把握は、各省庁の目的に応じた統計調査や処理が進むようになるとそれによることになり、地誌には町村単位の利はあっても公開もおそく利用できないものになってしまった。第四に編纂の技術上の欠陥として、画一の編輯例則を示してそれを全部記入させる方式をとったことをあげている。そのため担当者の意欲は刺激されず、地域の個性を描く余地もないことになってしまった。石田のあげるこれら四つの理由は妥当なものと考えられるが、それらは互に関連し合っていたと思われる。また皇居の炎上、内務省の火災などで全国から集めた地誌類や地図類を多く失ったことは大きな損失であった。加えて地誌は歴史の付属物という伝統的中国流の見方が当時の学者達にあり、これが役所内の対応に作用したであろうことも見逃せないことといえよう。

3 皇国地誌『安房』の形式と内容

皇国地誌編纂事業としては唯一刊行された『安房』の形式や内容はどのようなものであったであろうか。これは和紙に活版印刷されたもので、和装、扉、奥付などは明治 19 年 3 月とあるが、内務大臣山県有朋の序文には 19 年 5 月、内務次官芳川顕正の序文は 19 年 9 月とある。

編修官は、総修桜井勉、纂修浜野章吾、渡辺中、河井庫太郎、校訂市野嗣郎である。

構成は序文、目次など 17 丁 本文は上編 41 丁、中編 56 丁、下編 42 丁からなっている。その内容は第一表の各項目として示した。

第一表

大日本国誌『安 房』第三卷（皇国地誌）明治 19 年（1886）3 月刊 内務省地理局

上 編

建置 区域及幅員 名称 管轄 郡 首邑 名邑 地勢 気候 地種 里程 道路
橋梁 名山 牧場 砦場 岬角 島洲 暗礁 名川 溝渠 瀑布 湖沼 港湾 鉱泉

中 編

戸数 口数 民業 宗教 風俗 方言 郡役所 戸長役場 軍鎮 警察署 監獄署
裁判所 灯台 郵駅 郵便局 貯金預所 諸会社 学校 病院附風土病 神社 寺院
古墳墓 旧跡 公園 名勝 牛馬 舟車 物産 貢租

下 編

地方長官（国造 国守 守護職 城主 諸侯 知県事 県令）地方次官
人物 流謫 災異 雑事

この表を見て気付くことは、
土地の自然的物理的記載の多いこと（区域幅員，里程，地勢，山川，湖沼，海岸，気候など）
歴史的関連事項が多いこと（旧跡，神社，寺院，古墳墓，地方長官など），
役所の位置，規模の記載が目立つこと（役所，戸長役場，警察署，監獄署，など）
社会的事項はもっぱら数量的に示すのみであること（貢租，戸数，人口数，牛馬数，舟数，学校，
郵便局，病院など）

地域の実情を描けるのは物産と民業の程度であり，生活的なものとして宗教，風俗，方言がある。

このように『安房』の地誌書は，地域の諸事象を項目別に分解し，項目に従って数量的客観的に静的に記載されている。こうした地誌の記載の方式は，百科事典的事項的記載方式²⁰⁾ともいわれ，洋の東西を問わずとられてきた普遍性のある方式である。わが国にあっても風土記をはじめ，地誌といわれるものはほぼこの方式がとられてきた。それはその地域を記述するためにも，政治，産業，軍事などの必要に応じて地域の事情を知るため読むにあたっても，便利であり実用性に富んでいるからである。今日でもこの方式は地誌の一つの方式として採用されている。

しかし取り上げる項目は，何時も同じではなく，土地によって，時代によって，目的によって異なっている。人物といった項目は，今日の地誌では必ずしも扱われるとは限らないが，近世の地誌には名族，孝子節婦などの項目があり，土地の人物の功績を顕彰し称え記録すべきものとしてきた。これは中国の地誌にみられる官撰地誌の性格を継承しているといわれているが（石田）²¹⁾，この『安房』地誌にも人物の項目があり伝統的な近世的な地誌の形式を引継いでいることを示している。一方近世に出された地誌の多くには名所旧跡や古戦場などの項目があり，ここでは関連する詩歌が記され叙情的文芸的な表現が濃くなる傾向が見られる。しかし『安房』地誌ではこの項目はあるが，記載表現にはその傾向は認められない。

4 『千葉県安房郡誌』の発刊について

千葉県安房郡教育会は，1926年（大正15）『千葉県安房郡誌』を刊行している。B5版本編1104頁 巻頭写真24頁96枚 地図1枚，また震災誌104頁 巻頭写真14枚 とを一冊にまとめた大部なものである。

この地誌の編纂の目的主意は，緒言冒頭に，国運の隆盛には地方開発の自覚が必要であり，そのためには，「郷土の山川風物に親しみ古往今来変遷の跡を知らしめ以て愛郷の念を深からしむるに如くものなかるべし」としているように，郷土の地理や歴史のみならず現実の地域の実情を把握し，そこから新たな活力を得て郷土愛を育てようというものである。いわば行政的資料あるいは教育的資料として，地誌を位置付けていることがわかる。

この郡誌の刊行については，必ずしも順調にいったわけではなく曲折があったようである²²⁾。郡長 齊藤助昇の序によると，大正天皇即位記念事業として，安房郡教育会が計画したものである。郡教育会長 石崎常夫の緒言によれば，1915年（大正4）から資料の収集を始め，郡内の町村長や小学

校長に委嘱して各町村の資料を集め、別に委員を挙げてその編輯を進めた。大正8年出版しようとしたが物価騰貴のため見送らざるをえなくなった。1922年(大正11)郡会の議決で郡費で出版することになり内容に増補修正を加え印刷しようとしたが郡制廃止となりその意を果たすことができなくなった。そこで郡教育会がその原稿を引取り出版することになった。折しも1923年(大正12)未曾有の関東大震災を被ることになり、煙滅した部分を増補し、別に震災誌を加えて漸く公にすることができたとして、関係各位に経過と謝意を述べている。しかし執筆編集に当たった委員の氏名は記載されていない。

この郡誌の企画は大正天皇の即位礼を記念してたてられ、そこには元号が変わる歴史的節目にあたり、新時代の到来を国連の隆盛、郷土の文化や産業の振興への新たな決意と期待を表わしたものと受け止めることができる。このように新しい時代の到来を期してこうした地誌編集の事業が起こされることは、皇国地誌の背景としてもあったことである。即位礼記念行事としての地誌刊行は全国的にも見られたことであり、千葉県にあってはその動きはあった。いずれも大正年間(1912～1926年)乃至昭和初期にその刊行を見ており、長生郡誌(1913年)、海上郡誌(1917年)、匝瑳郡誌(1921年)、夷隅郡誌(1922年)などが、安房郡誌に先行して刊行されており、多くが大正天皇即位記念事業としての企画であることを唱っている。注目されるのは、いずれもその刊行が各郡教育会からの出版物となっていることである。これには郡制の廃止(1921年 大正11年施行)という行政の大きな改編がかかわっていたことと、それにとまなう事務移管、郡財政の処理の問題に教育会が関係したことなどがあるようである。君津郡などは郡制の廃止を記念して郡誌が編纂されている。郡制の廃止にとまなう郡経営の中学、女学校、実業学校、病院、道路、農事試験場などは県や町村に移管された。郡制廃止に伴う問題などについては、各地郡誌の作成意図、内容構成の比較検討、郷土教育とこれら地誌編纂の関係などとともに別稿として論じたい。いずれにしても、これら各郡誌の編纂の実質的推進者は教員層であり、この事業によって郷土意識を高め、郷土教育を担ったのは教員層であったと思われる。

5 『千葉県安房郡誌』の構成と記載内容

この地誌の章立ては沿革に始まり、位置区画及面積など、第二表に示したように全17章からなっている。括弧のなかは節の内容として示した。

その序にあるように「州郡治績の沿革偉人傑士の行実より山川風土の形勢、海錯土宜の多寡等に至るまで細大漏らさず特に現時の情勢を載録するに最も詳密を極めたり。」とあり、安房郡の詳細な郡政要覧、行政資料誌を目指していると見ることができる。しかし孝子節婦などをみると近世諸藩の地誌にみられる伝統を引継いでいる面もある。式英正²³⁾は、安房郡誌の内容構成や項目が皇国地誌『安房』のそれにより近いことを指摘し、皇国地誌をむしろ雛形として参照したのではないかと推察している。それは皇国地誌事業は1893年にすでに終わっていたが、先に見たように山口静子²⁴⁾の調査では『安房』の場合、国誌のもととなった郡誌・村誌の草稿や成稿の写しなどはわかっていないが、各地方官庁にはこの種のものが残っていることが各地の事例からわかっているからである。

第二表

千葉県安房郡誌	大正15年6月（1926）千葉県安房郡教育会
沿革（上古 中古 近古 近世 現代）	
位置区画及面積（位置境界 区画 面積 土地及地目反別）	
地 勢（総説 山系 水系 海洋並に海岸 地質及鉱泉 岩石及鉱物 土質及土性）	
気 候（総説 気温 降水量 湿度 風速風向 其他の気象 動植物の発生と季節）	
動植物（動物 植物）	
戸 口（各郡比較 年別人口 本籍人口族称別 出入人口 職業別戸口 人口動態）	
産 業（概論 普通農業 園芸 耕地整理 養蚕業 畜産業 林業 鉱業及土石類 農業団体 水産業 安房郡水産会・漁業会 工業 商業）	
交通運輸（総説 陸上交通 海上交通）	
政治経済（政治 選挙 町村会議員選挙調べ 経済 郡有財産 産業組合の概況 労銀及び物価 官衙公署）	
兵 事（総説 体格検査表 出征軍士戦病死者氏名 在郷軍人会 軍人後援会）	
衛 生（総説 医師会 伝染病患者及死亡調べ）	
保 安（犯罪 警備 伝染病）	
教化及救済（総説 小学校幼稚園 実業補習学校 各種学校 安房郡教育会 社会教育 図書館 慈恵救済 宗教）	
神社及名勝旧跡（神社 寺院 旧跡 名勝）	
人情風俗（総説 冠婚葬祭 年中行事 服装及住居 方言 俚諺 童謡 伝説）	
名族及人物（名族及藩翰 各種の人物 褒賞受領者 孝子節婦）	
町村誌（北条町以下43各町村）	
震災誌（総説 地形の変動 人畜の被害 家屋其他の被害 教育上の被害 慰問と 救護 聖恩無窮 青年団其他の活動 同情の寄金 御下賜品及慰問品）	

しかしこの地誌は1886年（明治19）刊行の『安房』から40年を経ており、その間の地域変化はもとより、科学的資料の集積もかなりのものがあり、『安房』とは異なる項目や記載内容、表現も多く、必ずしも『安房』が雛形とは言切れない面もある。その幾つかをあげながら、内容を簡潔に述べると次のようである。

歴史的記載を、沿革として比較的簡潔に扱っていること、

地勢として山系、水系などをあげ、目立つ山の位置、高さ、河川の水源、延長など数字をあげて具体的に記載していること。地質も全体に適切な記載で、珊瑚礁の存在を特筆すべきものと注目し、妥当な説明を行っていること。さらに土質及土性の節も設けていること。

気候については、気温、降水量、風向風速の各地観測結果を平均値などに整備して表として示していること。また動植物の季節による変化を記録し記載していること。

動植物の記載は『安房』にはない項目である。この章ではこの土地の地形、気候、海が多く、動植物を生育させているとして、普通に見られるもののみを一応分類した上で名称のみをあげている。

戸数、人口は年次別等の明細な統計数値をあげ、統計表として示している。概ね1921年（大正10）末の町村の本籍人口、現住人口、年別人口、本籍人口族称別、出入り人口、職業別戸口な

ど基本的な値を示している。

産業にあつては、普通農業以下工業、商業にいたる各節をつくり、各々沿革や概説の項を設け、統計値のあるものはこれを表として載せ、それに基づき適切な説明解説を行っている。これら統計数値は大正期の最も詳細な資料として評価できる。

交通では鉄道の郡内開通の経緯と感謝を記し、各駅の乗降客数を表としている。また郡内町村間の道路の里程表が折り込まれており、利用されることを期している。

政治経済のうち政治は、郡会と郡会議員、町村議員、県会議員などの選挙に関することなどである。町村治の記事は学校建設のことが多い。付表として町村名及区域として小字名の一覧が作られている。一方経済の内容は、年次別、町村別の租税と生産に対す租税の割合を表としたものなど郡及び町村の財政を一覧しており、また物価表や労賃の表も作られている。これらは『安房』にはないものであった。

兵事では日清戦争、日露戦争、大正3年乃至9年戦役の各部にわけ、出身町村別に階級を付した出征軍士戦病死者氏名を載せている。この章も『安房』にはない。

教化及救済の章の多くは郡内小学校、各種学校の沿革や現状を詳細に記している。安房郡教育会の活動も報告している。社会教育は青年団等の表彰記録である。

神社及名勝旧跡の章にあつては、神社の名称、祭神、社格、所在地を一覧し、著名な神社について解説している。寺院についても宗派、所在地、檀徒数等を一覧表としており、主なものについて説明を加えている。旧跡は館山城址などで主なものはその由来を述べ、名勝は鯛の浦などで伝説やうたわれた詩歌をあげている。

人情風俗では冠婚葬祭、年中行事、定期市、札所と御詠歌、方言、舟歌田植え歌、伝説など多岐にわたる民俗的状況が収録されている。こうした人情風俗の類いは古風土記にはあり、『安房』でも取上げられているが、この郡誌に比してその種類や量は少ない。

名族及人物は藩政時代の主な領主、日蓮、菱川師宣など歴史上の著名人、近時活躍した僧侶・学者・村長などである。孝子節婦は古く褒賞された人に加えて明治になってからの人も載せている。褒賞受賞者は明治からの国の褒賞制度での人々である。

町村誌の章は、郡内43の各町村ごとに、その位置、構成する大字、沿革、累代の町村長氏名と任期、産業、名所旧跡などを簡潔にまとめたものである。この郡内町村誌は『安房』にはなかった項目であるが、町村によってはいささか簡単に過ぎる感がする部分もある。

震災誌は関東大震災によりこの地は大災害を被ったが、この状況を巻頭の14枚の写真で示すとともに、地形変動、人畜と家屋の被災状況、教育の被害などの各項目に分け、郡内町村ごとに数値をあげて記録したものである。教育の被害は校舎の被害のみでなく、生徒の精神的動揺にも言及している。

このように『安房』に較べて格段に詳細かつ統計数値の裏付けをもった客観的な記載が行われたが、式英正²⁵⁾も指摘するように、図表現はなきに等しく、僅かに巻頭に一枚ケバ式一般図があるのみで

ある。統計の数表は多いけれども、主題図は全くない。しかしこの郡誌より刊行が7年早い大正8年（1919年）発刊の『千葉県誌』²⁶⁾（千葉県）では、気象の章の管内温度分布図、管内雨量分布図の僅か2図で、ともに等値線図法の表現ではあるが、統計表と気候の主題図が登場している。しかし地図類としては千葉県管内実測図（1/20万）と銚子港全図（1/2万2千）の地図のみが差込みでついているに過ぎない。こうした状況を勘案すると、当時は統計表に較べて、地図類は作成印刷の繁雑さの割りには利用価値が低いとみられ軽視されていたのではないかと推測する。

しかしこの郡誌では、それまでにない地域を記載する方法として写真を登場させている。巻頭に載せた郡内各地の写真は96枚に及び、神社仏閣、名勝旧跡のみならず、各地市街地、農業や水産物の現場風景、石材場の作業の様子、海水浴場の風景など内容的に多彩であり、この点ではこの地方の情景を多面的に捉えており、写真による地域の記載の可能性を示したものといえよう。なお『千葉県誌』上巻も自然地理編で山岳、河川、海岸などあわせて34枚の風景写真を示し、人文地理編では産業交通関係で40、神社寺院関連で47、主な市街地28など、100枚を超す写真が載っており、印刷紙質の関係で各章のはじめにまとめられている。これからみると、写真による事物の紹介、地域の風景の記載が大正期には始まっていたが、写真はただ掲載されているだけでこれについての特段の説明もなく、掲載した意図が伝わってこないものもある。写真が地域の記載方法として本格的なものになっていたとはいえないであろう。

6 『房州の地誌』と尾崎帛四郎

『千葉県安房郡誌』の刊行から僅か3年を経たにすぎない1929年（昭和4）に同じ安房郡教育会は、尾崎帛四郎著『房州の地誌』を古今書院から出版した。両者は同じ地域を対象としながら全く異なった土地の記載を行っており、79頁の小冊子であるが『房州の地誌』は地理研究者による純粋な地誌として、地理学的地誌を示したものとして注目される。この『房州の地誌』は、尾崎がその後の房総の研究もまとめた『房総地誌の研究—60年の軌跡』（1985年 古今書院刊）の第Ⅲ編（281～319頁）に再録されている²⁷⁾。それによれば、序1を田中啓爾東京高等師範学校教授が書いており、一路邁進科学的地誌研究に精進している尾崎の姿を佳とし、そこから明らかにされてくる房州の地理的現象やその考察を世に明らかにすることが急務であるとし、この地誌が日本地誌研究の進歩に貢献すること多大であると高く評価している。田中啓爾は1920年から3年間欧米に留学しアメリカ地誌学派の影響を受けて帰国し、日本の地誌の近代化につとめていた。尾崎帛四郎は、当時県立長狭中学校教諭であったが、田中啓爾の研究室に通い科学的地誌研究を進めていた。

千葉県中等教育研究会長の鈴木登の序2に、『房州の地誌』刊行の経緯が記されている。それによれば、千葉県中等教育研究会が昭和3年度の研究奨励金を交付したものの中に、尾崎の「房州における地理的考察」という論文があり、田中啓爾教授の審査によって、特に優秀と認められた。これは最新式の研究法により、房州という地理的単元を最も克明に整理した徹底的努力の結晶であるとし、これを『房州の地誌』と改題して安房郡教育会がその出版につとめたとしている。自序もあるが田中啓

爾教授はじめ関係者への謝辞にとどまっている。これにより、この地誌が尾崎の個人的研究論文「房州における地理的考察」として書かれたものであり、地理研究者の見方による地誌としてつくられたことがわかる。

齊藤功²⁸⁾は、この『房州の地誌』を含みその後続く房州での尾崎の一連の業績を追跡し整理しているが、それによると、尾崎が鴨川に在職したのは1926年（大正15）から1933年（昭和8年）までの8年間であり、『房州の地誌』は初めての業績である。それに続いて、「鴨川町に及ぼせる鉄道の影響に就いて」（1931年 地理学評論7 124-137）など滞在中に4編の論文をまとめ、この滞在期間中に調査した成果は2編、この間に着想を得た業績は3編の多きに達している。

齊藤は、尾崎の主要な業績からその研究の特色を検討し、「房総の地域性解明を目標としながらも、房総半島が①暖地性の地域であり、②東京との交通・経済的關係に配慮しながら、③農民が砂丘や後背湿地、漁民が磯根といった微細環境を活用している姿を、④徹底した現地調査によって解明しているといえよう。—中略—当時においては⑤斬新な航空写真を使って、舟の位置までも明らかにするという⑥微細地誌記載の精緻化が見られるのである。このことが、尾崎の研究をいつまでも色あせないものにしていくと考えられる」とまとめている。まさに人々の活動の差異を生活圏のなかの細かな環境の差異に着目する地生態学的方法の開拓をすすめてきたといえよう。彼が後年文部省にあって、新社会科の発足の混乱期にこれまでの地理教科書とは全く異なった教科書（1 村の子ども 2 都会の生活 3 土地と人間 4 気候と生活）を執筆し、身近な地域とそこでの人々の生活に目を向けることを社会科の軸として打ち出したが、それはこの安房地での体験が基礎になっていることを彼自身が述べている²⁹⁾³⁰⁾³¹⁾。

7 『房州の地誌』の内容と特色

『房州の地誌』の構成は2章で、Ⅰ章は環境としての房州、Ⅱ章は房州における人間活動の様式である。内容の項目については、第三表に示した。

Ⅰ章は地理的位置、海洋、気候、地形、地質からみた房州が取り上げられているが、同時にそれら各自然構成要素が互いに関連し合い房州の自然をつくっていることを見ている。Ⅱ章は農業、水産、工産、交通系、休養地、駅後背地、人口分布、集落地理の各項目からなっている。

これらの項目をみると、『安房』や『安房郡誌』にくらべると、沿革など歴史関連の項目がないこと、名所旧跡・神社寺院などの項目のないこと、警察官轄区を除いて官庁など行政機関に関する記述がないこと、さらに人情風俗、名族人物などの項目もなく、項目が網羅的ではなく極めて選択的である。また農業でも房州の特徴とされる乳牛飼育、花卉栽培、房州びわ、などに焦点をしぼり、これを描くことで房州の特性を捉えようとしている。また房州の道路、鉄道、水路の交通体系の動向を述べるだけでなく、その変化によって人や荷物を扱う拠点の位置が移動し、集落に盛衰が見られる状況をなどを説明している。こうした人々の活動の視点から地域を捉えることは、これまでの地誌に見られなかったことであり、地理学地誌の方式を示すものとなった。

第三表

『房州の地誌』尾崎庸四郎 昭和4年6月（1929）千葉県安房郡教育会 古今書院

はしがき

I 環境としての房州

地理的位置

海洋に恵まれた房州

気候上の特色

地形・地質からみた房州（寄木細工的な房州 汀線の移動 海岸線の地形
房州の地質 地形の年代）

II 房州における人類活動の様式

農業関係の分布状態（牛の分布 促成及露地栽培 花卉栽培 房州びわ
みかんその他の果樹栽培 桑・煙草その他
旧決定による房州町村別田10aの地価比較）

水産からみた房州（約説 鰹節その他 鮮魚の輸送）

房州工産の二・三

房州の交通系

休養地としての房州

各駅後背地・旧四郡別及び警察管轄区域

人口分布を通してみた房州の占居様式

集落地理の考察の適例（北条町について 鴨川町について）

あとがき

また地理学的地誌の新鮮さを示すものは、他種類にわたる多くの主題図の提示である。搾乳牛の分布と種畜場・製乳場、促成栽培地、花卉栽培地、びわの分布、みかん栽培地、春蚕の分布、さざえの分布、人口分布など小さい単位のドットで示され、一目で分布情況が把握できるドット分布図を示している。主要漁港漁獲高、滞在避暑客数などは棒グラフ統計地図で、工場分布、各駅の一日平均乗降人数比較などは円グラフ統計地図で表わしている。平均等初霜期日線図も作成して無霜地帯の存在を示した。この地誌に載っている地図やグラフは28図の多きに達する。これらの地図のもととなる野外観察、聞き取り、資料の収集を尾崎は徹底的に行い図化している。この地図化することやグラフ化することは、事象の分布傾向を視覚を通して分かり易く示すことであり、客観化をとともなうことである。それ故地域の特性を科学的に記載しようとするにあたっては必要な重要な方法であり、新鮮な記載方法であった。

さらに注意すべきことは、あとがきの部分で、房州全体の地理的性格を描くとともに、その中を副地理的単元に分け地域の構造を説明しようとしていることである。具体的にはまず海岸地帯と山間地帯に分け、海岸地帯は東岸、南岸、西岸地帯に、山間地帯は東部斜面と西部斜面に分ける。これらは自然環境や生業、産物などの違いがあり、既に人々によって、三海岸地帯はそれぞれ外房、房南、内房といわれ、東西斜面は外房州、内房州と呼ばれており、地域的違いが認められ意識されているとしている。こうした地域区分の発想はそれまでの地誌には全くみられなかったことである。

あとがき

明治前期の皇国地誌以来、安房の地域が地誌作成のテストフィールドとして繰返し選ばれてきたことは大変に関心を引くところである。房総半島の南部を占める安房国は古代以来の行政単位地域であり、この半島を東西に走る低いが陰しい房総丘陵によって北縁を限られまとまった自然地域をつくり、文化や産業にも開放性と閉鎖性の特色を認めることが出来る地理的単位として取組み易く理解し易いことがあったと思われる。また、東京から適度な距離にあり接近も容易であったこともテストフィールドとして好条件をもっていたといえよう。

この同じ地域を記載した三つの地誌書は、記載の仕方から見ると、『安房』と『安房郡誌』は基本的に同じスタイルであり、百科事典的総覧的記載であり、風土記以来の伝統的事項別の記載方式であるといえる。これに対して『房州の地誌』は、安房の地の特色が描ければよいことを意図しており、したがって記載された事項は分野としては狭いものになり、取上げた事象も選択的であったが、分布図の使用など近代的科学的地誌として登場し、地誌の記載の方法に地理学の見方や方法を加えたということが出来る。前二者も事項的ではあり、その点では客観的な側面を持っていたが、記載の意図としては地域情況の把握という行政側にとって利用可能なものとの要素が働いており、地誌書は今日的に言えばデータブック的な役割りをもつものであった。しかし多岐にわたる事項の資料を集め編集出版に多大の時間と費用を要したため、データブックとしての機能に疑念が入り、皇国地誌事業では挫折を招くことになり、また安房郡誌も長期にわたるものになり、当面期待された郷土産業振興のための基礎資料に必ずしも結び付かなかったと思われる。こうしたことが、概して地誌書の評価を高いものにさせてこなかった背景にあるように思われる。

この小論では、明治から昭和初期の地誌書の動きを安房地域を通して見たことにもなるが、その後、今日に至るまで、多くの自治体で自治体史や自治体誌の出版が行われてきた。それらは町村合併などを機会とするものが多いが、それらを概観すると、この対照的ともいえる記載の仕方の両者は、なお併存しているように思われる。青野・尾留川³²⁾による「日本地誌」に代表される様に、地理研究者は地域的特色を科学的に捉え記載することにつとめてきた。筆者らが公刊した千葉県史の地誌編もこの流れにある。しかし多くの自治体誌は必ずしもそうではない。「安房郡誌」に見られた様に、郷土の戦病死者名など郡誌として記録されるべきことがあり、今日では選挙やその結果、財政情況など記録されるべきことは多い。そこには総覧的網羅的ではあるが、地理研究者の求めるものとは違った地域像があり、それはむしろ貴重なデータブックを作っている。「安房郡誌」はこの点で、当時の人々の生活や産業情況、社会情況などを丁寧に記録してくれており貴重なデータとなっている。このように考えると、地域を描くにも様々な方法があつてよいことを改めて思うものである。

本小論を進めるに当たっては、早稲田大学の特定課題研究 2002-A 044 自治体史誌の特性と課題、同 2003-A 046 日本における地誌と地理教育の展開に関する考察の研究費の一部を使用できたことを記し謝意を表したい。

文献および注記

- 1) a 千葉県 (1996):『千葉県の歴史 別編 地誌 1 (総論編)』639p
- b 千葉県 (2000):『千葉県の歴史 別編 地誌 2 (地域編)』995p
- c 千葉県 (2002):『千葉県の歴史 別編 地誌 3 (地図集編)』491p
- 2) 千葉県 (1919):『千葉県誌』上・下 1044p
- 3) 白井哲之 (1993):『県史地誌編の編纂動向とその課題 山田安彦教授退官記念会編『転換期に立つ地域科学』古今書院所収 344p
- 4) 安藤 清・伊藤勝久・戸崎賢一 (1997):『自治体史における地誌の特徴と課題 中村和郎編『地理学「知」の冒険』古今書院所収 206p
- 5) 内務省地理局 (1886)『大日本国誌 第三卷『安 房』
- 6) 千葉県安房郡教育会 (1926)『千葉県安房郡誌』1208p
- 7) 尾崎席四郎 (1985):『房州の地誌 同著『房総地誌の研究』第Ⅲ編 古今書院所収 336p
- 8) 石田竜次郎 (1966):『皇国地誌の編纂—その経緯と思想— 同著『日本における近代地理学の成立』第2章 1984, 大明堂 310p
- 9) 山口静子 (1977):『「郡村誌」と「大日本国誌」—明治政府の地誌編纂事業— 東大史料編纂所報 12 52-67
- 10) 式 正英 (1992):『日本の地誌の発達過程に関する考察—主に明治後半から昭和初期までの地誌書について—お茶の水女子大学人文科学紀要 45 77-94
- 11) 10 に同じ
- 12) 吉田東伍 (1900 ~ 1907):『大日本地名辞典』全 11 冊 (富山房) 5180p
- 13) 山崎直方・佐藤伝蔵 (1903 ~ 1915)『大日本地誌』全 10 巻 博文館
- 14) 石田竜次郎 (1966):『日本における地誌の伝統とその思想的背景 同著『日本における近代地理学の成立』第1章 1984, 大明堂 310p
- 15) 14 に同じ
- 16) 内務省地理局 (1874 ~ 1879)『日本地誌提要』
- 17) 9 に同じ
- 18) 9 に同じ
- 19) 14 に同じ
- 20) 野間三郎 (1962):『地理学のあゆみ』古今書院
- 21) 8 に同じ
- 22) 14 に同じ
- 23) 10 に同じ
- 24) 9 に同じ
- 25) 10 に同じ
- 26) 2 に同じ
- 27) 7 に同じ
- 28) 齊藤 功 (1997):『尾崎席四郎と南房総の地域研究 新地理 44-4 1-11
- 29) 尾崎席四郎 (1979):『戦中・戦後地理教育史への証言—国定教科書執筆体験を通じて— 新地理 27-1 1-12
- 30) 尾崎席四郎 (1979):『微細地誌』二宮書店 202p
- 31) 中川浩一 (1992):『尾崎席四郎先生を悼む 新地理 40-1 1-2
- 32) 青野寿郎・尾留川昌平 (1967 ~ 1980)『日本地誌』全 21 巻 二宮書店